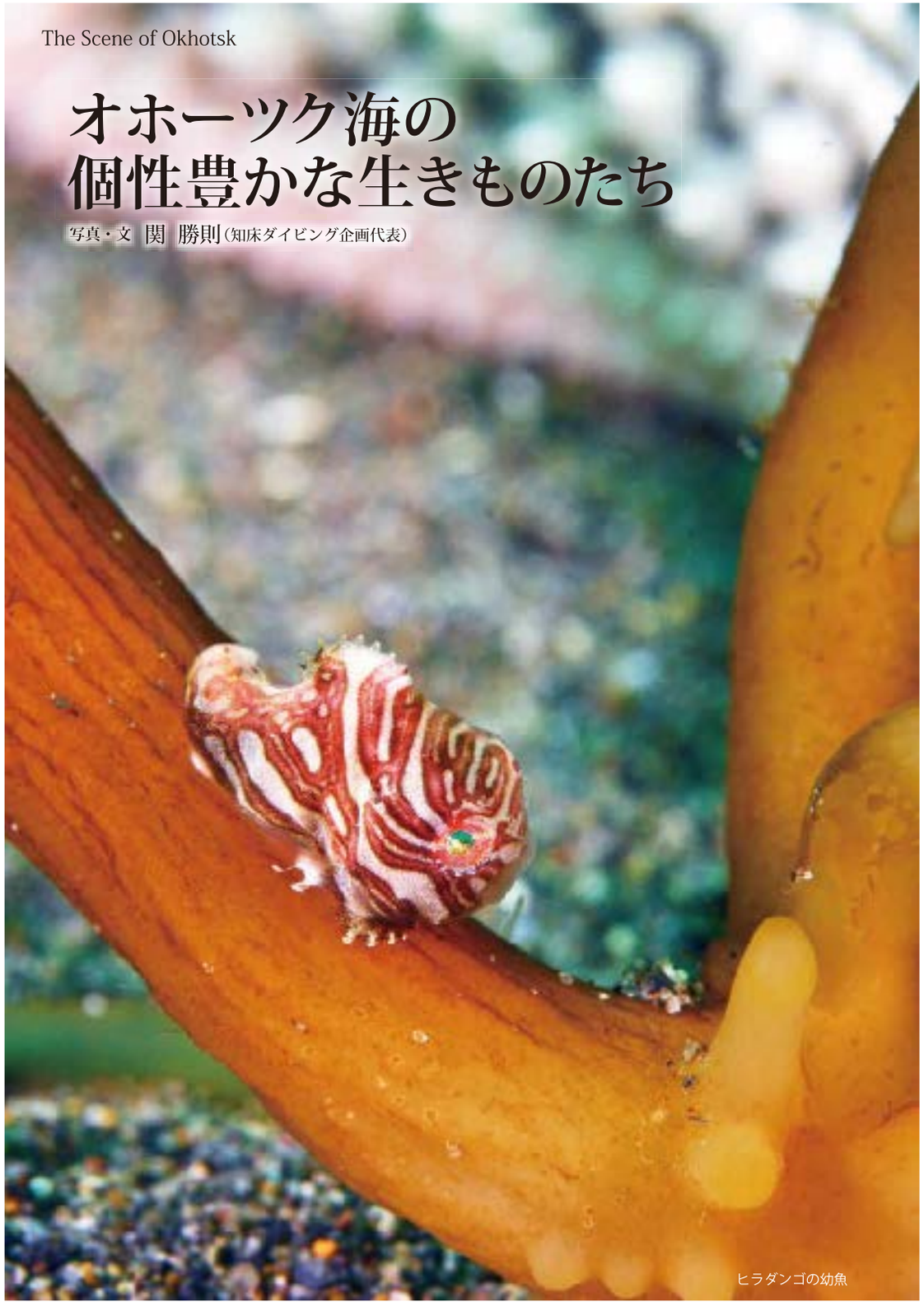
The Scene of Okhotsk

オホーツク海の個性豊かな生きものたち

写真・文 関 勝則（知床ダイビング企画代表）



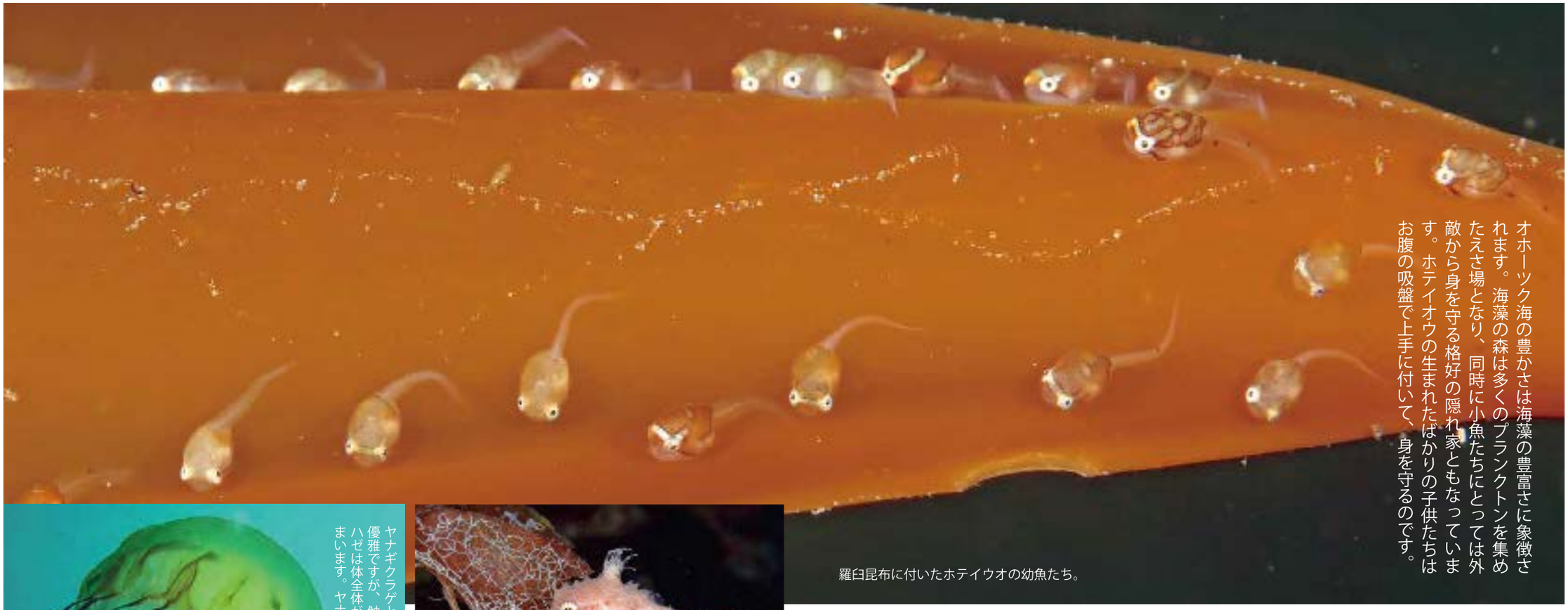
ヒラダンゴの幼魚

意外と知られていない北の海中世界

北の海のイメージは暗く冷たい世界です。流氷が南下し始める頃のオホーツク海は時化が続き、一層重苦しく鉛色に染まります。しかし、水面下ではわずかな太陽の光が海藻を育て、まだ若い昆布を照らし黄金色に輝かせてくれます。岩場に育つイソギンチャクなどの腔腸類も、南のサンゴ礁と見まがうほどカラフルで、ダイバーの目を楽しませてくれます。

流氷直下の海水温はマイナス１度。生き物たちにとっては、極寒の世界です。多くの魚類は、岩の割れ目や石の下で、じっとして動かず春を待ちます。わずかな魚とプランクトンやクラゲ類が流れに身を任せて漂っています。しかし、知床に生い茂る海藻たちにとって、最も気持ちの良い季節なのです。羅臼昆布はこの水温の時、日に 1cm 以上は成長するのです。

海中の相互関係



オホーツク海の豊かさは海藻の豊富さに象徴されます。海藻の森は多くのプランクトンを集めたえさ場となり、同時に小魚たちにとっては外敵から身を守る格好の隠れ家ともなっています。ホテイオウの生まれたばかりの子供たちはお腹の吸盤で上手に付いて、身を守るのです。

羅臼昆布に付いたホテイウオの幼魚たち。

ヤナギクラゲとホカケアナハゼ。ヤナギクラゲは大きな傘と長い触手がとても優雅ですが、触手からは刺胞という「毒針」を発射します。しかしホカケアナハゼは体全体が瘤状の突起でおおわれているため、その毒針ををはねのけてしまいます。ヤナギクラゲの側で安心安全の暮らしを満喫しているようです。

春に生まれたナメダンゴは１年間浅場で生活してから深い海底へと移動します。次に姿を見ることができるのは、数年後の初冬。親に成長し、産卵するために浅場にやってきます。身体のサイズに達った甲殻類は大切な食糧となりますが、このワレカラは少々大きすぎて餌にはなりませんでした。

オワンクラゲに寄生するヤドリイソギンチャク。数年前、ノーベル賞受賞の研究対象にこのオワンクラゲが重要な役割を果たしので、その名を知る人は多いと思います。ヤドリイソギンチャクはこのクラゲと長い旅を共にします。成長すると離れて海底に降り、砂泥地での生活に入ります。

オオイボイソギンチャクとヤドリイバラモエビ。オホーツク海にはオオイボイソギンチャク、キタオオイボイソギンチャクといった大型のイソギンチャクが生息しています。イソギンチャクの触手には毒があります。でも体壁には毒がないので多くの甲殻類が付きます。食腕の毒にも耐えられるこのヤドリイバラモエビは、自らも毒々しい色合いの模様を誇張して敵から身を護っているようです。

置戸町に息づく秋岡芳夫コレクション

置戸で若者たちに語る秋岡芳夫。竹とんぼは秋岡が最後まで作り続けたモノで、『竹とんぼからの発想―手が考えて作る』という著書もあるくらいだ

秋岡芳夫（1920～1997年）と聞いて、すぐにその存在を思い浮かべる人は少ないであろう。秋岡芳夫は、戦後日本の高度経済期に、工業デザイナーとして時代の先端を走った人である。と同時に、その時代から大量生産・大量消費社会に疑問を投げかけ、「暮らしのためのデザイン」という持論の実践のため、日本各地で手仕事やクラフト産業の育成のための活動を展開した。また「手の復権」を提唱し続けた彼は、日本の伝統的な生活用具やそれを製作するための道具の、半生かけて収集した。その膨大な秋岡コレクションが、置戸町に保存されている。

今回は、なぜ秋岡コレクションが置戸町に残されているのか。そのことを辿ることで、秋岡芳夫の思想と、置戸町がオケクラフトを生んだ背景を

秋岡 芳夫（あきおか よしお）＝1920年4月29日～1997年4月19日）。工業デザイナー、童画家、著述家、教育者。熊本県出身。工業デザイナーでありながら大量生産・大量消費社会に疑問を投げかけ、「暮らしのためのデザイン」という持論の実践のため、日本各地で手仕事やクラフト産業の育成のために尽力。手仕事や手道具の楽しさ、おもしろさを伝える多数の著述や、さわれる工芸展、市の立つ工芸館やワークショップを仕掛けるなど、活動領域の広さや手法の独自性は他に類例がない。国際竹とんぼ協会を設立。
撮影：Photographer　森茂宏

最初に作られたオケクラフトの作品

オケクラフトの展示・研修施設「オケクラフト森林工芸館」

振り返ってみたい。

秋岡芳夫プロデュース「オケクラフト」鮮烈デビュー

置戸町は、戦後の昭和30年代をピークに林業・製材業で発展してきた町だ。その後どの地域にも共通するように、林業が衰退し過疎化が進んでいく。置戸町ではその頃から、地域における生産教育を社会教育の最重要課題と位置づけ、昭和40年代から全国の先進事例を学ぶセミナーを開催し、名称は幾度か変更しながら現在まで続けてきている。

このセミナーの講師として、1983（昭和58）年に招いたのが秋岡芳夫であった。

その当時すでに秋岡芳夫は、「里もの生産（一人一芸の村計画）」という考え方を持ち、東北工業大学（仙台市）の意匠学科教授に就任するのに合わせ、岩手県大野村でその実践活動を展開していた。以下は引用となるが、『「一人一芸の村計画」の狙いとは、自然のめぐみに十全に働きかけ、自分たちの生活を豊かにするための生産技術を一人ひとりが持ち合おうというもので、そのためには、目の前にある素材に何十倍もの価値を生み出す「工芸」的なものがふさわしい』というものだ。秋岡は、岩手県大野村では1980（昭和55）年からワークショップ的な講座を季節ごとに開催し、その中から生まれたのが、大野木工と呼ばれるロクロを使って木を彫って作り上げる器であった。秋岡のこの実践活動がその後、宮城県津山町や置戸町、島根県匹見町などへと広がっていったのである。

さて、秋岡を置戸に招いた当時のことを、田村昌文さん（67・元副町長）に聞くことができた。置戸町で、秋岡と親交を持った人たちは、いまでも「秋岡先生」と恵愛をこめて呼ぶ。

「最初に秋岡先生を招いた時は、それほど先生のことを知っていたわけではありません。当時（昭

森林工芸館の館長を務めるなど、秋岡と親交の深かった田村昌文さん

和50年代）は私も町役場の職員でしたが、町としてもこの町の基幹資源である木材をもっと活用する取り組みが必要と考えておりました。図書館でもその考えから木工などに関する図書をずいぶん集めていて、そこで秋岡先生の著書を何冊かあり、この人の話を聞いてみたいとなったのです。私はその頃は、大野村の活動のことなど知りませんでした」と言う。

１９８３（昭和58）年に秋岡芳夫を招いての講演が実現した。秋岡は講演のあと、青年木工グループとの懇談を行い、その中で「置戸の資源を活かすのに木工ロクロ技術を導入して、北国から新たな生活文化を発信しては」と提案した。そして、大野村でもロクロ技術の指導にあたり秋岡の盟友で日本有数のロクロ師である時松辰夫氏を紹介し、すぐにその年の5月に時松氏による木工ロクロ技術講座が開催された。これが、言うなればオケクラフトの始まりである。

1983 年に東京日本橋高島屋で開催された『北の自然から生まれた木の器オケクラフト展』での秋岡芳夫

秋岡は、その年の『芸術新潮』10月号で、置戸町の木工クラフトを紹介した。さらに11月には東京日本橋高島屋で『北の自然から生まれた木の器オケクラフト展』が開催されるなど、一気に前進させていった。田村さんはこう言う。「ロクロに初めて触れてから半年後に東京で展示会ですよ。普通ならあり得ないじゃないですか。秋岡先生だからできたことかも知れないですが、初めて置戸に来て木工ロクロを紹介した時から、東京で展示会をやるということが頭にあったのでしょう。先生は、地域のことは地域では評価できない。外からの評価があって初めて地域が気づくのだと。その意味では、オケクラフトもまず外の評価を得るようにした。秋岡先生のプロデュース力ですよね」。

秋岡芳夫がイメージした人とモノが交流する場

オケクラフトの鮮烈なデビューに伴い、置戸町では、作り手養成のための「オケクラフト研修制度」を１９８４（昭和59）年に立ち上げる（研修制度は何度かの制度変更や中断を経て現在も続いている）。「作り手を育てることは、その地域で生きていきたいという人を育てることだ」（田村さん）と秋岡は言っていたそうだ。

オケクラフト森林工芸館近くに建てられた「どま工房」。「日本の手仕事道具―秋岡コレクション」が収蔵されている

秋岡が描いたどま工房のスケッチ。実際に完成したものは、このイメージにかなり近い形になっている

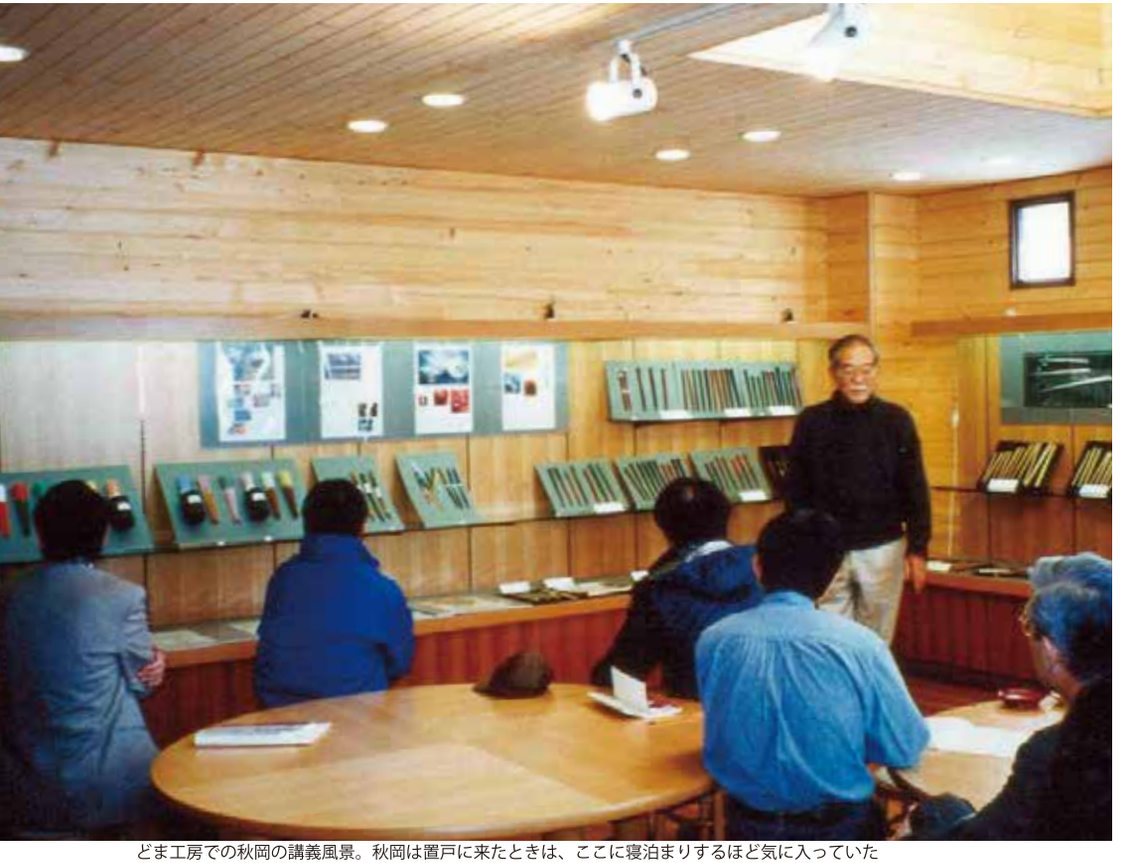
再び田村昌文さんの話に戻る。田村さんは平成３～８年にオケクラフト森林工芸センターの館長を務めた。「私が着任して気付いたのは、秋岡先生は、最初の講演以来、置戸に来ていなかったのです。私は先生の話をたくさん聞く必要があると思い、在任中の6年間で計24回も先生に来ていただきました。先生はいつも、いろんなモノを持ってきて、いろんな話をしてくれました。話や発想が、次から次へと広がっていくのでしょう」。

そうしたなか、１９９４（平成６）年に置戸町「クラフトパーク計画」が策定された。町の基本資源である森林や農畜産物の質の向上に加え、加工等による付加価値を創造して地域産業を育てるとともに、工芸的な考え方に基づくまちづくりを進めることを基本理念としている。これは秋岡の提唱してきた「里もの生産＝コミュニティ生産方式」の考えが流れていると言っても間違いではないだろう。

その拠点施設として、「人とモノが交流する場所」という秋岡のイメージを基に建設されたのが「どま工房」（山村文化保存伝承施設）。秋岡は、この施設のイメージを夢中になってスケッチしたそうだ。実際の外観も秋岡のスケッチを彷彿させる。そして突然に、「僕のコレクションを提供するから置戸で活かしなさい」と言ったという。田村さんは「いきなりで驚きました。先生が条件としてあげたのは一つ。展示は手に触れられるようにすること」だったそうだ。

「どま工房」の「どま」とは「土間」のこと。「土間」は、昔の民家の中にあり、そこで農作業ができない日や夜に、何か手仕事をする作業場として、またそこに人が集まり話したり作業をしたりする場だった。そうして暮らしの中の知恵や道具が伝えられてきたのだ。このイメージから「どま工房」と名付けられた。

置戸町に寄贈された秋岡のコレクションは、およそ1万8千点。秋岡は１９９７（平成９）年に他界するが、遺族が秋岡の意思を汲んで貴重な秋岡コレクションは、置戸に一括寄贈された。



どま工房での秋岡の講義風景。秋岡は置戸に来たときは、ここに寝泊まりするほど気に入っていた

作り手と使う人の暮らしの質を高める

生前の秋岡は、どま工房が完成してから、秋岡は置戸に来るたびここで町民らと語らい、酒を酌み交わし、そして寝泊まりした。

「秋岡先生のコレクションは、日本の暮らしの中で完成していった生活道具、生産道具です。昔からの手仕事の技術を、現代に生かしていく、という考えが先生の底辺にあったのだと思う」と田村さんは言う。

では秋岡芳夫の目指していたのは何だったのか。田村さんに聞くと、「それは、先生がよく言っていた暮らしの質を高める、ということでしょう。地域の資源を活かし、そこに工芸的な考えをもって、人を育て、暮らしを作る。そういうことだったのではと、私は思います」。

作り手が質の高いものを作り、それを使う人が満足や喜びを感じることで暮らしが豊かになる。その繰り返しで、作り手はより質の高いものを作る。きっとこの循環が、「暮らしの質を高める」ことなのだと思う。

最後に、今年置戸町は開町１００周年という年に当たる。置戸町が進めてきた生産教育を社会教育というまちづくりに、秋岡芳夫という存在は、色濃く影響を与えてきたと言っていいだろう。

現在のオケクラフト森林工芸館館長・五十嵐勝昭さんはこう話す。

「『生産教育』とは、『地域資源を活用する中から人を育て、地域の活力を高める』という概念であり、戦後一貫して教育を中心としたまちづくりに力を注いできた置戸町の社会教育活動の中でも、当時は、今までにない考え方として位置づけられました。昭和59年以降、置戸町が本格的に作り手養成に取り組んでから、31年間で49名が研修を受け、17名が独立。現在は20名が町内各地に個人工房を持ち生産活動を続けています。

作り手を育てる→モノづくり（オケクラフト生産）→生業、産業→置戸町の振興・発展と、置戸町のまちづくりの考え方は、まさにオケクラフトの取り組みそのものであり、秋岡先生が常々おっしゃっていた『普段の暮らしを豊かにする』ことが、『人々の心を豊かにする』、そしてマチを豊かにするのだと思います」。

地域の疲弊は、オケクラフトが誕生した30年前よりさらに深刻化している。だからこそ、秋岡の言葉がこの時代に強く響いてくる。「作り手を育てることは、その地域で生きていきたいという人を育てることだ」。

地域の資源を利用して、そこでしか作れないもの。それは、その地域に生きる人が作るからだ。作り手を育てることで、地域の価値を高め、豊かさの質を高めていく。地域の生きる道は、これに尽きるのではないか。

オケクラフトの作り手たちは、世代を継いで研修に励んでいる

オケクラフトセンター森林工芸館

常呂郡置戸町字置戸 439 番地の４
- 午前 10 時～午後６時
- 休館日：毎週水曜日（７月から祝日を除く）
- 年末年始（１２月２９日～１月２日は全日休館、１月３日は午前９時～正午まで営業）

TEL:0157-52-3170　FAX:0157-52-3388
http://www.town.oketo.hokkaido.jp/kougeihp/